「うちらってブスじゃん」
　世の中には、決まりごと、というものがある。その決まりごとに付随して、理不尽なことや、辛いことがいっぱいある。だから、エミは、耐え難いことがあると呪文を唱える。
「うちらってブスじゃん」
　それは、あきらめの魔法。ブスだから仕方ないよ、つばを吐かれようが、かかと落としされようが仕方ないよってこと。
　例えばこう。綺麗な女性が転ぶとする。きゃっ。声までかわいい。道行く男性陣は、「大丈夫ですか」と声をかけて手を差しのべる。でも、これが、エミ、もしくは、わたしのようなブスだった場合、誰も声をかけないどころか、見て見ぬふりも甚だしい。挙句の果てには、声を出して笑う、指を差して笑う。はっきり言って晒し者。
　男女平等が叫ばれるこのご時勢に、美人とブスにはれっきとした不平等が存在する。しかし、誰もそれには気づかぬふりを決め込んでいるのだ。そして、さらに女の中で格差社会が存在する。それは女の中だからこそ存在するのかも知れない。だって、「いやあ、彼女はテニスがとってもうまいね。でも、ブスだね」とか、「ほんとに歌が上手だよね、歌手顔負けだよ。でも、ブスだよね」だとか、女の場合必ず最後に容姿を形容する言葉がくっついてくるんだもの。そして、美人ならそりゃすごいわよ、才色兼備。ブスなら、天は二物を与えず。そう言われちゃう現実。男なら実力で挽回できるところが、女には挽回できない仕組みになっている。
　エミってば、ケーキをふたつも食べちゃってるけど平気かしら。わたしの目の前でケーキをおいしそうにほおばっているエミを見ていると、なんだか胸焼けがした。
「エミ、甘いもの食べすぎだよ」
「いいの、いいの。人生八十年って言うけどさ、うちは、おいしいもの食べられたら別にいつ死んだってかまやしないの」
　口の端に生クリームをつけたエミがにんまりと笑った。
「うちらってブスじゃん。どうせわたしたちなんて結婚もできなきゃ子供もいない、さびしい老後を送るに決まってんだからさ。サナエだってそうで思うでしょ？」
　エミはいつだってわたしに同意を求めてくる。確かにわたしだってブスだけど、女を捨てたわけじゃないの。エミみたいに太ってもないし、まあ、やせ過ぎといえばやせ過ぎだけどさ。でも、エミとわたしが初めて会ったときに、お互いに共通する雰囲気を感じていたことも確か。この子もいじめられてきたんだろうなって。それで、わたしたちはつるむようになった。
「うちらは裏切りっこなしにしようね。かわいくてもさ、すぐに裏切る女いるじゃん？　合コンに呼んどいてかませ馬みたいな扱いしてさ」
　また始まった。面倒くさいから言ってやる。
「うちらってブスじゃん、しょうがないよ」
「だよねぇ。がははははは」
　この子のこういう明るさには、けれど、救われる。
「あっ、でもさあ、見てみ」
　エミが指を差すほうを見ると、窓の外に桜が咲いていた。
「桜だね。やな感じ」

　わたしたちブスにとって、春は鬼門である。なんたって中学、高校のときなどは、クラス替えがあるたびに新しいいじめが始まるのだからやってられない。だから、わたしたちは、春にいい思い出がない。春は、おびえて暮らす季節、というわけだ。
「大学って平和だよねぇ」
　しみじみとエミが言った。
「いじめがないもんね。みんな男やおしゃれに夢中でさ。私たちのことなんて眼中にない感じ」
　それはそれでエミは寂しいらしい。
「うち、サイパンに移住しようかなあ」
「なんで？」
　また突拍子もないことを言い出した。
「だってさ、サイパンってデブがモテるんだって」
　ほら現実逃避だ。
「エミ、いま体重何キロあるの？」
「九十二」
　わたしは思わず飲んでいた紅茶を噴出しそうになった。まさかそこまでいっているとは！
　それからしばらくエミと連絡がとれなくなった。携帯電話がつながらない。頭をよぎるいやな予感。自殺…？　まさか、エミに限ってそれはない。そう願いたい。でも、ほんとはすごい寂しがりやで、落ち込むときはとことん落ち込む子だからなんて心配していると、何日かして電話がかかってきた。
「もしもし、うちだけど」
　その電話は公衆電話からだった。
　声を聞いて安心はしたけれど。
「なにやってんの？　心配したじゃないの」
「ごめん、いま病院なの」
「病院？」
　そう、病院。エミは、電話口で照れたように言った。
「糖尿病が思った以上に深刻でさ。あのあと体調が悪くなって入院したの」
　ほらみたことか。だから言ったじゃない。なんて言ってもしょうがないから口には出さないけどさ。
　お見舞いに行くと思ったより元気で。
「だから言ったじゃない、太り過ぎだってば」
「今回はちょっと反省。だって危うく死ぬとこだったんだから」
　なんて肩をすくめておどけるあたりが憎たらしい。
「わたし決めた、ダイエットするわ」
「そうね、じゃあ目標作れば？」
「目標って？」
　彼氏を作る。わたしは、さりげなく言った。いまのエミにとっちゃ究極の目標。

　ええ、でも、そんなこと言ったって…。なんてぶつくさ言っているけれど、頬を赤らめちゃってまんざらでもない様子が、やっぱりエミも本当は普通の女の子みたいに恋愛もしたいんだ、と思わせてなんだかわたしを安心させる。
「じゃあ、エミ、我慢するんだよ、甘いもの。約束だかんね」
「わかったわよ、わたしも命が惜しいもん」
「よし、彼氏よ、彼氏」
　サナエも人の心配しないで彼氏くらい作りなさいよ、とにたつくエミに舌を出して、余計なお世話よ、じゃあね、ってな具合で病室を出た。
「エミちゃんどうだった？」
　わたしが車に乗り込むなりケンジが言った。
「まあ元気そうにはしてた。ダイエットすることにするって」
「確かにエミちゃんは太り過ぎだよ」
　で、ぼくのことは言ったの、とケンジがわたしの顔を覗き込む。
「言えるわけないでしょ、彼氏ができたなんて」
「だよね」
　ケンジがアクセルを踏んだ。雨、強くなってきたね。ケンジの声が聞こえたけど、わたしはなんにも答えずにエミの病室の窓のほうを振り返って眺めていた。エミが窓際に立ってこちらを見ている気がしたから。
「うちらってブスじゃん」
　エミの声が耳の奥でよみがえる。だから頑張るんだよ、わたしたち。